掲載日:2025年01月16日, 面名:教育, 記事ID:KIJ20250116_A0008000102601002
(C)十勝毎日新聞社

自分の「キャラ」、人間関係円滑に

研究は面白い！ 大学教員に聞く ―㉜

北星学園大学 村井史香専任講師（31）

むらい・ふみか　広島県出身。北海道大学文学部人文科学科卒、広島大学大学院教育学研究科心理学専攻博士前期課程修了、北大大学院教育学院教育学専攻博士後期課程修了。北大病院で勤務しながら大学院に通い、高校・大学でのスクールカウンセラーや相談員などを経て昨年４月から現職。

北星学園大学社会福祉学部心理学科で専任講師を務める村井史香さん（31）の専門は、「キャラ（キャラクター）研究」。小学生～大学生における「キャラ」を介した友人関係などをテーマにしている。研究の動機や内容について聞いた。（聞き手・安藤有紀）

―キャラ研究を始めた経緯は。

私が中高生の頃、それなりに楽しく学校に通っていたものの、教室では友達とノリを合わせ、波風を立てないように気を使っていた記憶がある。帰宅後はその日の言動を思い返して「もっとこうすればよかった」と悶々（もんもん）とし、友達とワイワイ楽しく過ごしている自分と一人になったときの内向型の自分に大きなギャップがあると感じていた。

キャラ研究との出合いは、大学３年生の時に読んだ論文。私が感じていた「外側の自分と内側の自分の乖離（かいり）」に触れられていて、自分の悩みも研究テーマになると知った。一方、文献では「キャラ」が悪いものとされ、最後に「キャラを捨てて本当の自分で他者と関わるべきだ」と結論付けられているものが多かった。学校・学級に適応するために子どもたちが努力や工夫をして頑張っているのに、「キャラは良くない」とする見方に疑問があった。キャラは本当に悪なのか、学校や学級に適応するとはどういうことかを明らかにしたいと研究を始めた。

―研究手法は。

キャラには、①人から付けられる②自分から押し出す③集団の中で自然発生的に決まる―の３パターンあると言われる。小学４年生～大学生を対象に質問紙調査と面接調査を併用し、キャラの認知度や経験率、初めてキャラを認識した時期などを調べている。

北星学園大の３年生の専門演習（ゼミ）の様子

―研究から見えたことは。

キャラはこれまで、人との関わりが苦手な人やコミュニケーションに自信がない人が使うものと言われてきた。しかし実際は「友達から好かれたい」「人気者になりたい」という「賞賛獲得欲求」や、むしろ友達と積極的に関わりたい動機の方が関連していることが分かってきた。「セルフモニタリング」（自己呈示変容能力）の高い人の方がキャラを使っており、特にクラス替えや入学・進学など新しい関係をつくるタイミングにおいて人間関係を円滑にするツールとして活用している。キャラが悪なのではなく、キャラの使い方に目を向ける必要がある。

とはいえ、キャラと本当の自分の間のギャップが大きいと疲れてしまうのも事実。どんな関係性の中であれば成り立つのかなど、新たな観点での研究も進めており、子どもたちの支援にもつなげていければ。

―十勝の印象・思い出は。

高校生の頃からドリームズ・カム・トゥルーが大好きで、受験勉強の時などもずっと曲を聴いていた。ライブにも行き、吉田美和さんの出身地である池田町も数回訪れた。ワイン城に行ったり、入ったお店で美和さんのサインを見つけたり、とてもすてきな思い出がある。

―中高生へのメッセージを。

こんな悩みを持っているのは自分だけと思っていても、同じことで悩んでいる人は意外と多いかもしれない。親とは別の〝斜めの関係〟にある大人や友達など周りの人に話してみたら、「自分だけじゃないんだ」と気付くこともある。話すことで悩みのループを断ち切れるのではないか。